

# トマトなど冬の温室栽培に効果

加西市で、トマト栽培の温室に導入された蓄熱装置が、冬場の燃料代節約に効果的として注目されている。装置の中に入れた特殊な化合物が、昼間の室内の熱を吸収して蓄え、気温が下が

## 蓄熱装置で燃料費節約

### 加西の岡田農産導入

蓄熱装置は、ヤノ技研(宝塚市)が開発。「エネバンク」と呼ばれ、1枚約882平方センチ、厚さ約2・7センチのカプセルの中に、特殊な化合物の蓄熱材を詰めている。

導入したのは、岡田農産(加西市下宮木町)の温室約260平方メートル。エネバンク512枚を壁際につるした。同センターが岡田農産の温室のデータを調べたところ、1日平均の燃油使用量は約13・1トン。蓄熱装置を使わない場合の約16・7トンから抑えられたという。

温室を管理する経営者の岡田毅さんは「冬場の燃料代をいかに安く抑えるかが

る。夕方以降に放出する仕組み。県立農業水産技術総合センター(同市別府町)の実証試験では、約26%の燃料費節約効果があつたという。

(河尻 皓)

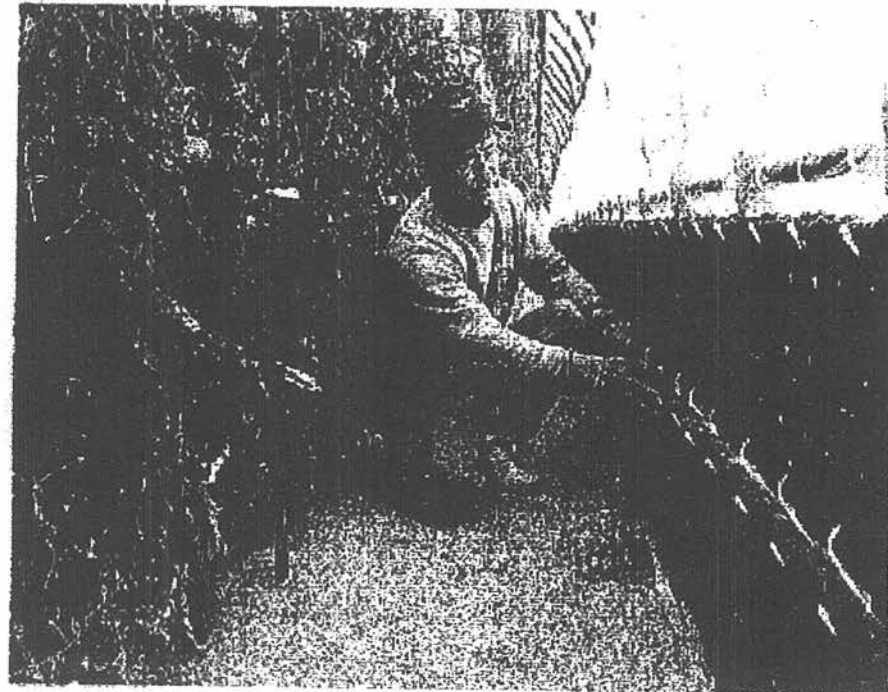
### 宝塚の企業が開発 20%以上の節減確認

重要なので、効果がありません。かた」と話す。

ただ、エネバンク1枚は重さ約2・5キロで「設置する際などの負担が大きかった」と(岡田さん)という。

同技研はほぼ半分ほどの大きさで重さ約1・3キロの新タイプを開発。1月からこのタイプにつるし替え、実証試験をしているという。

設定温度は化合物の配合で調整でき、県内外のミカンやイチゴ、カーネーション、洋ランの温室でも使われているという。同技研の矢野直輝社長は「加西で育てられてきたエネバンクで、燃料費の高騰に苦しむ農家の助けになれば」としている。



温室の壁際に設けられた蓄熱装置「エネバンク」のカプセルに触れる岡田農産の岡田毅さん(加西市下宮木町)